06 果てしない大空と広い大地の中で

株式会社ジー・エス
代表取締役 郷　成禄 さん

一国一城の主

その大きな、オシャレな建物の中に一歩入ると、塗りたてのペンキの匂いが鼻にツーンときた。よく見るとこの建物は細部に至るまでペンキの塗り残しがない。そのせいか、あのペンキ特有の匂いがより一層きつく感じられた。前を見ると階段があった。上りきった。すると右手にはスタッフルーム。そして、その右奥には社長室があった。

案内されたその社長室は、よくあるような、きらびやかな作りではなかった。それよりもポカポカとした温かい居心地の中に、ワクワクする楽しさと、凛とした空気が同居したような空間が広がっていた。

それもそのはず。部屋の雰囲気というものは大抵、その住人が持つ性格や特徴によって決まるものだから。

社長室で待っていてくださった郷さんに、早速この度の自社工場（東京都大田区）建設の目的から話を聞いた。すると郷さんは、ずばりこう言う。「当社の独り立ちのためと、こうした自社工場を持つことによって、一人ひとりの社員にリサイクル・プランナーとして、さらなるプライドとモチベーションを高めてもらいたかったから」。

郷さんの会社は廃棄物処理業。この会社では、社長だけでなく、どの社員も明るくて元気だが、3K（キツイ、キタナイ、キケン）が付きまとう仕事なだけに、内実、相当しんどいときもある。

やれ“環境問題だ”とか、“町をキレイに”などと声高に叫ぶ人は多い。ボランティアでやる人もいるだろう。ときどきなら、という人もいる。そうした中、いくら仕事とは言え、夏の炎天下、冬の寒空の下、どしゃぶりの雨の中、来る日も来る日も毎日毎日やり続けることは大変な作業である。だが、それをやってくれる人たちがいるからこそ、日本の町がクリーンな環境を保てているのだ。

ゴミを収集、分別、処理する作業は隣で見ているだけでも、その大変さがひしひしと伝わってくる。郷さんもこの会社を作ってから今までいろんなことがあった。悔しい思いをしたこともあるという。だが、そんなときでさえ決してへこたれずに前を向いて一歩一歩、進んできた。だからこそ、今こうして自社工場を建設できるまでに成長した。

論功行賞もいいだろう。しかし社長が一人ひとりの従業員と平等に公平に接することができて、はじめて会社という城は強固になる。この難攻不落の城の主は郷さん。だが城は一人で作れるものではない。社員みんなで力を合わせてこそ作れるものなのだ。

こんな名言を思い出した。「人は、城であり、堀であり、生垣である」。

廃棄物処理業という仕事

廃棄物処理業は、もともとは屎尿業、いわゆる汲み取り業がその始まりだと言われている。戦後の急速な近代化による社会資本整備に伴って、バキュームカーが姿を消すようになっていった。そこで、それを生業としていた人たちへの雇用救済策の一環となったのが、現在の廃棄物処理業だということらしい。

廃棄物とは、廃棄物処理法により大きく2つに分類される。生活系と事業系（オフィスなど）から排出される一般廃棄物。そしてもうひとつが建設現場などから排出される産業廃棄物。

同社では、これら2つの廃棄物に加えて不用品の買い取り、さらには中間処理業に至るまで手広く行っている。中間処理業とは、収集してきたゴミを自社工場（処理施設）で仕分けする作業のことで、例えば紙や木屑などのゴミには息吹を吹きかけ、RPF（固形燃料）として甦らせることも行っている。

郷さんが同社を立ち上げた1990年初頭の日本における一般廃棄物の総排出量は年間、約5000万トン。その後、やや増える傾向にあったものの、アルミ缶やペットボトルの回収・リサイクル活動の強化などとも相まって、2000年の約5236万トンをピークに減少傾向に転じた。そして、2005年には、約5000万トン（1日あたり約13万トン）と、約15年ほど前の水準にまで戻った。

一方、建設現場などから排出される産業廃棄物は1日当たり約110万トン。年間では約4億トンにも達する。産業廃棄物の場合にはここ15年間、総排出量は大体4億トン前後で推移しており、あまり大きな変化はみられない。

こうした多岐にわたるゴミというものは、ゴミだからといって決して粗末に扱えないものも多い。一般の人の目には決して触れてはならない、極秘扱いのものが含まれているからである。そのため同社の施設内でも警備は非常に厳重で、施設内に設置された、かなりの数のテレビカメラが24時間休むことなく監視の目を光らせている。

嬉しい手紙の背景

同社が今までに築いてきた、クライアントに対する仕事の確実さや丁寧さというものは、信頼という形に姿を変え、取引先からときどき礼状が送られてくることもあるという。そんなことを郷さんは「今まで頑張ってきて、ほんとに良かったなって。すごく嬉しいよ」と顔をほころばせながら語ってくれた。

そんな話を聞いていると、こちらまでもが目頭が熱くなってしまう。ひとつのことを丹念に丹念に継続して積み重ねていかない限り、どんなことであれ信頼というものは築けない。そのためには大変な労力と精神力が必要である。

だからというわけではないが、郷さんのようなオーナー社長で、しかも従業員を多数抱えている場合には、どんなに辛いことがあっても、社長は現実から逃げることは決してできない。また、もしそんなことをしようものなら社員とその家族は間違いなく路頭に迷うことになるだろう。

だから、どんなに大変なことであってもやり抜くしかないのである。やり抜くということがどれだけしんどいことなのかは、その立場になってみないとわからない。人は口では簡単に言う。「人を雇えばいいのに……」「そんなに深く考えなくてもいいんじゃない……」。

しかし、そうした意見は、単なる絵空事にしか過ぎないことが多い。人ひとり雇うのでさえ大変なことである。また仮に人を雇うゆとりがあったとしても、毎日の業務に追われてしまい、教える時間さえ持てずに結局は雇えないこともある。ただ単に口で言うのと、やるのとでは雲泥の差なのだ。

だから、自ら会社を立ち上げ、以来、20年にも及ぶ長きにわたって会社を成長させ続けてきた郷さんが「従業員のことを考えると夜も眠れないこともある」と、人情味丸出しでいうのも当然。苦労人ほど、従業員に対する思いやりや優しさが滲み出てくるものだから。

元祖シロガネーゼ

郷さんが生まれ育った東京港区にある、四の橋商店街（現、白金商店街）はその昔、多くの町工場でひしめき合っていたという。

夕方ともなると、仕事が終わって、汗と油とホコリまみれになった手で、ギャーギャー泣き喚く小さな赤ん坊をあやしているお父っつぁん。手ぬぐいを頭に巻いて、両手に幼子の手を引きながら、晩飯の買出しに急ぐお母ちゃん。などなどで埋め尽くされていたという。「それはもう、賑やかな下町だった」と郷さんは懐かしそうに話す。

実際、幼いころは、日が暮れるまで泥んこになりながら、近所の田んぼや池でトンボやザリガニ獲りに奇声を上げていたそうだ。

ところが、1980年代になると、そんな下町風情の古き良き白金の町並みもガラリと変わったという。バブルの台頭である。金に糸目をつけない地上げ屋によって、地価がどんどん高騰していった。それに伴い、近所のスクラップ工場、板金工場、ネジを作っている下請け工場など、多くの町工場が閉鎖に追い込まれていった。郷さんの友人たちの多くも、追い出されるように白金の町を後にしたという。

そんな中、郷さんの祖父の代から続けてきたスクラップ工場も、ご多聞に漏れず仕事量が年々減るばかりとなった。そこで自らが一念発起して、株式会社ジー・エスを1991年に立ち上げたのである。

それから早17年。去る7月には自社工場の落成披露の宴を迎えられるまでになった。会場には、多くの仲間、家族、社員などが列席していたが、その中には、なんでだろうと疑問に思うほど、年長者や子供たちの姿も目立っていた。

すると演壇でスピーチをする人たちの言葉で、その理由がわかった。

郷さんは直接、接する機会の多い社員や仲間だけを愛するのではなく、社員の家族、仲間の家族をも愛し、すごく大切にしているのだと。だから、会場が親子ほど年の差が離れている人たちの熱気で包まれていたというわけである。

白金の様子

そんな微笑ましい光景を目にしながら、今まで同社が味わってきた苦楽を語る列席者のスピーチから浮かんできたのは、やっぱり同社のリーダーである郷さんの、強くて、優しい人柄だった。

だからだろう。白金の町がどれだけ変貌しようとも、郷さんの熱いハートだけは、どんなものよりも一番オシャレに輝き続けるのは。

趣味と健康

仕事に明け暮れてきた郷さんだが、余暇の楽しみ方も忘れない。自己ベスト73というゴルフの腕前もさることながら、ときどき海の中にもぐっては、悠然と泳ぐマンタや、かわいらしい小魚たちと戯れながら、現実を忘れることもしばしばあるという。

海の中は、無重力。日頃、仕事のため、競争のために粉骨砕身して働く体を守るべく、どんなに重たい鎧を身に付けていても、一旦、水の中に入ってしまえば、その重さを感じることはほとんどない。

宇宙飛行士が、宇宙に旅立った後、地球に戻ってくると、アポロ15号の乗組員だったジム・アーウィン氏のように出家するひとが多いとも聞く。その理由は、一説によると、純粋酸素を吸い込むことと、無重力が関係しているらしい。つまり、それらによって間脳が刺激され、いわゆる瞑想状態と同じ状態になるからだとも言われている。

間脳とは、人間がいわゆる魚類だった時代から備

わっている原始脳である。無条件の愛や、おぼれそうになった人を赤の他人が飛び込んで助けようとする衝動的な行動などは、この間脳が無意識に働くからだとも言われている。

現代の人間社会においては、理論構築が優れている人や、計算や分析が得意な人ほど頭脳明晰だと思われがちになるが、その役割は大脳新皮質が司っている。大脳新皮質は、人間の進化の過程でもっとも最後に発達してきた脳で、この脳があるお陰で人間社会では本能的、感情的な行動が抑制され、倫理に基づいた社会的規範が成り立っているのである。

しかし一方、この脳が肥大化したことにより、同じ動物である人間同士の争い事が、いつになってもなくならないのも事実。また、ディベートや議論などは人間だけが出来る特殊能力ではあるものの、その反面、ウソをついたり、言い訳をする動物も人間だけ。しかも罪を犯した人までもが真実を隠し、自己の正当性や無罪を主張できてしまうのも、この大脳新皮質のなせる業。

そう考えてくると、大脳新皮質は人間社会にとって有益なことばかりではなさそうである。それに反して、間脳は、無限の愛を生み出す脳とも言われ、使っても使っても他人を傷つけることが決してないと言えよう。

スキューバダイビングをした後は、郷さんも「日頃の疲れが癒され、ストレス解消になって、すごく気持ちがいい」と語るように、無重力である水の中では宇宙空間と同じように間脳が刺激されるため、瞑想と同じ現象が起こるのだろう。その結果、精神安定やストレス解消、もっと言ってしまえば健康までもが導かれるのかも。

まさに間脳は、百益あって一害なし、である。

真のグローバル人

白金生まれの白金育ちの郷さん。だが、実は郷さんの国籍は韓国。そんなことがあってか、営業先で、ある企業の担当者から社員がこんなことを言われたことがある。「韓国人が経営する会社との取引はちょっとね……」。

そして、その社員は帰社するやいなや、郷さんに向かってこう口走ったという。「社長は社長。国籍なんか関係ない。そんな会社とは、うちが付き合う必要は一切ない。とっとと止めましょう」。

この言葉に郷さんはどれほど勇気付けられたかわからない。しかしそれは常日頃から社員のことを思いやり、大切にしているからこそ、今度は社員のみんなが大好きな社長と会社を守ろうとして、自然に出てきた言葉なのだ。

社長として30人超の従業員を抱える郷さん。インタビューの間、郷さんの口からは何回となく「俺は社長をやらせてもらっている。そのことにすごく感謝している」と語った。俺が社長だ！と言わんばかりの経営トップが多い中で、だからだろうか。決して偉ぶることがない郷さんに触れると、みんな郷さんのことが好きになるのは。

どんなに自分が成長しようとも、誰に対しても差別することなく、人との付き合いを大切にする郷さん。そんな郷さんだからこそ、これからも決して人の上に立つことなく、一人の地球人として、郷さんの大好きな松山千春さんがいう「♪果てしない、大空と、広い大地の、その中で～♪」立ち続けて行くことだろう。

未来に続く、果てしないクリーンな環境作りに向かって。　（しあわせジャーナリスト 小松孝）

お問い合わせ先

株式会社ジー・エス
東京都大田区京浜島 2-14-10
Tel: 03-5755-8853　Fax: 03-5755-8854
URL：http://www.gs-recycle.com

聞き手（しあわせジャーナリスト）
小松 孝 さん

1965年生まれ。日興證券、共同通信社、ダウ・ジョーンズ社を経て2005年、しあわせジャーナリストとして独立。"健全な社会は一人ひとりの健康からつくられる"をモットーに現在、執筆活動中。主な著書・共著等に「IR経営戦略」（総合法令）、「広報PR・IR辞典」（同友館）、「パブル・エコノミー」（共同通信社）など。